

<全体的な補足>

<哲学的な問題に答えることが難しいのは、それが経験を超越しているからである>と言われることがあります(特に現代の形而上学に関する本に多いように思います)。これはある意味では、正しいのですが、別の言い方をすると、哲学の問題が難しいのは、それに答えようとするとき、同時に哲学の他の問題に答えることが必要になり、二つの作業が循環してしまうことが多いからであるといえます。具体的には、意味論、存在論、真理論、指示論、認識論などの問いが循環してしまうのです。

<参考文献の補足>

八木沢敬『分析哲学入門』講談社選書メチエ

八木沢敬『意味・真理・存在 分析哲学入門・中級編』講談社選書メチエ

§2 問答の観点からの指示論

1 フレーゲ「意義と意味について」(Über Sinn und Bedeutung) 1892

2 ラッセル「表示について」(On Denoting) 1905

3 ストロークソン「指示について」(On Referring) 1950

ストロークソンは、この論文では、一意指示使用をもつ表現を「表現」、またそのような表現で始まる文を「文」とよび、次の3つを区別する。

(A1) 文

(A2) 文の使用

(A3) 文の発話

これに対応した次の区別。

(B1) 表現

(B2) 表現の使用

(B3) 表現の発話

表現は意味をもつが指示しない。指示を行うのは、表現の使用ないし発話である。同様に、文は意味を持つが真理値をもたない。真理値をもつのは、文の使用ないし発話である。

——ここまで復習、ここから本日——

ストロークソンは、文が意味を持つ条件についての次のように説明している。

「文が有意義(significant)であるか否かという問いは、何かを話すためにその文が論理的に使用することができるような言語習慣、規約あるいは規則が存在するかどうかという問いである。したがって、それが特定の機会にそのように使用されているかどうかという問とは全く独立である。」(P. F. Strawson, *Logico-Linguistic Papers*, Ashgate, p. 8, 訳, 223)

「フランス王は禿げている」は、それを論理的に使用できるような言語的規約が存在するならば、有意味であることになる。つまり、この文が現在発話される時には、「論理的に使用されていない」としても、この文は有意味である。

文は、いつ発話するかで、真になったり、偽になったりすることがある。それゆえに、

「文そのものが真であるとか偽であるとか語ることはできない。単に、真な、あるいは偽な主張をおこなうためにその文は用いられる、と語ることに過ぎない。あるいは、(もしこちらのほうが好まれば) 真な、または偽な命題を表現するためにその文が用いられる、と語りうるに過ぎない。」(216)

前回、文の使用が真理値を持つと述べたのは、不正確だった。文の使用が真理値を持つことがあるというべきであった。同様に、表現が指示をおこなうと述べたのも、不正確であった。表現の使用が指示を行うことがあるというべきであった。

「意味 (meaning) は、文あるいは表現の関数である。言及すること・指示する事、および真偽は、文あるいは表現の使用の関数である。言及すること・指示すること、および真偽は、文あるいは表現の使用の関数である。表現の意味 (私がこの語を用いている意味において) を与えることは、特定の対象や人間を指示したり、あるいは、それらに言及したりするために、その表現を使用するための一般的な指図 (general directions) を与えることである。文の意味を与えることは、真な、あるいは偽な主張を行うために、その文を使用するための一般的な指図を与えることである。」 (Ibid. p.7, 同訳、p. 219)

フレーゲは、語の *Bedeutung* が対象であり、*Sinn* はその対象の与えられ方だと考えた。ストローソンは、語の *meaning* は、<語を使用して対象を指示するための一般的な指図>だと考えている。これは、*Frege* の *Sinn* の定義と少し似ている。

フレーゲは、文の *Sinn* を思想 (文の真理値の与えられ方=真理条件) と考える。ストローソンは、文の *meaning* は、<文を使用して、真 (あるいは偽) な主張を行うための一般的な指図>だと考えている。これもまた *Frege* の *Sinn* の定義と少し似ている。

フレーゲおよびラッセルと、ストローソンが異なるのは、ストローソンが、表現と文をそれらの使用からハッキリと分けたことである。

■前回の質問

ストローソンならば、「フランス王は賢い」という文は、真理値を持たないという。それでは、次の問にどう答えるだろうか。

「a さんの時刻 t における「フランス王は賢い」の発話は、真であるか？」

「私が今「フランス王は賢い」と発話するなら、その発話は真であるか？」

この問に対して、ラッセルならば、<「フランス王は賢い」という発話は、正確に表現すると、「フランス王でありかつ賢いものが存在する」という発話である。そして、フランス王は存在しないので、この発話は偽である>というだろう。

ストローソンは、次のように述べている。

「完全に有意義なその句を、このような特定の仕方を使うときは、端的に誰にも言及することに失敗しているのであるから、われわれは真なことも偽なことも端的に述べることに失敗している。もしそう言いたければ、それは、この文の見せかけの使用 (a spurious use) であり、この表現の見せかけの使用である。[...] そしてそのような見せかけの使用は、われわれがよく知っているものである。洗練された小説、複雑な創作はそれに依存している。」 (Ibid. p. 10, 訳 p. 226、下線部の訳文を変更)

したがって、ストローソンならば、上記の問いに次のように答えるだろう。

<「フランス王は賢いのか」と問われたならば、私たちは、それに対して「そのとおり」とも「違う」とも答えないで、「フランス王は存在しないので、その質問は無効だよ」と答えるだろう。したがって、「フランス王は賢い」と発話することはない。

もしそのような発話が行われたならば、それは無意味ではないが、真でも偽でもない発話、つまり見せかけの発話である、というだろう。そして、見せかけの発話は、劇や小説に見られる。

したがって、上記の問いの a さんの時刻 t における「フランス王は賢い」の発話は（もし時刻 t が、現代のある時刻ならば）、真でも偽でもない見せかけの発話である。>

■ストローソンの議論に従うなら、次のように考えることができる。

①文「s は p である」が有意味であるためには、「s」を使用して何かを指示できることは必要ない。しかし、発話「s は p である」が、真理値を持つためには、「s」の使用が何を指示していることが必要である。

「ナウシカは少女である」も「フランス王は禿げている」も理解可能である。つまりそれらが、どんな時に論理的に使用されるのかがわかる。その意味で有意味である。（もちろん、「どのような使用が論理的な使用であり、どのような使用がそうではないのか」という問いに答える必要があるが、ストローソンのこの論文には、その答えはない。）

②「s は p であるか」という質問（疑問文の発話）が有効であるためには、「s」を使用して何かを指示していることが必要である。「s」の使用が何も指示していないならば、その質問は無効である。そして、「s は p である」という発話は、真でも偽でもない。

「フランス王は禿げているか」という質問は、フランス王が存在しないときには、無効である。

③「s は存在するか」という質問が有効であるためには、「s」の指示対象が存在する必要はない。

「フランス王は存在するか」という質問は、フランス王が存在しなくても、有効であろう。なぜなら、さもなければ、私たちは、存在するものについてしか、それが存在するかしないかを問えないことになり、そして、その場合、その答えはつねに、「はい、存在します」となるだろう。

■③の場合に、指示が行われていなくても良いのはなぜだろうか。

これを説明するには、一意指示表現の使用規則を二種類に分ける必要がある。ストローソンの言い方では、「指示規則」(rules of referring) と「帰属規則」(rules of attributing) 「帰因規則」(rules of ascribing) の二種類である (*Ibid.* p. 13, 同訳 p. 234)。指示に用いられる表現であっても、つねに指示に用いられるとは限らず、指示に用いられる場合もあれば、叙述（記述、帰属、帰因、述定）に用いられる場合もある。

（この区別については、後にドネランが「指示と確定記述」荒磯敏文訳(原文 1966) (松坂陽一編訳『言語哲学重要論文集』に所収) で詳細に論じている。）

「ボルトの妻は、存在するか」

この問いの「ボルトの妻」は、指示に用いられているのではなくて、記述に用いられているのだと考えることができる。そのことを明示すれば、この問いは次のように言い換えられる。

「ボルトの妻であるものは、存在するのかわ」

この中で、「ボルトの妻」は主語ではなくて、主語の名詞句の中で記述に用いられている。ラッセルの記述理論は、このような書き換えを主張するだろう。

しかし、このように書き換えても、「ボルトの妻であるもの」という名詞句が、指示に用いられているのではない。ラッセルの場合、論理的な固有名が残る。存在に関する問いにおいて、論理的な固有名は、何かを指示しているのだろうか。

「S は存在するのかわ」とか「S は存在しない」の「S」の使用は、対象を指示しているのかわ、について、ラッセルやストローソンは、答えられていないのではないだろうか。

ミニレポート課題

「指示と記述の区別が明確な、主語述語文の例を上げて下さい」

「指示であるか記述であるかが曖昧な、事例を挙げて下さい」

■指示と記述の区別の曖昧さ

「ボルトの妻は、存在するか」

この問いを問うものは、ボルトの妻がいるかどうか知らない。しかし、「ボルトの妻」の意味を知っている。つまり、<表現を使用して対象を指示するための一般的な指図>を知っている。これは、<もしxがボルトの妻であるとしたら、xがボルトの妻であることを知る方法>を知っていることである。

しかし、ボルトに妻がいるかどうか知らないので、この表現によって対象を指示することを意図しているのではない。

(ストローソンならば、「ボルトの妻は、存在するのか」の「ボルトの妻」を記述とみなすことに反対すると推測しますが、では、「sは存在するのか」や「sは存在しない」というような文について、彼がどのように考えるのか、現在の私にはわかりません。)

ストローソンは、次の例で、指示と記述の区別の問題を取り上げている。

(ia)あれが、その海峡を一日に二度泳いだ人です。

(iia)ナポレオンが、ダンギアン公の処刑を命じた人であった。

(ib)青の人はその海峡を一日に二度泳いだ。

(iib)ナポレオンはダンギアン公の処刑を命じた。

(ia)と(iia)での文法上の述語「その海峡を一日に二度泳いだ人」「ダンギアン公の処刑を命じた人」は「ストレートな仕方で帰属的な仕方で使用されているとはおもえない」(訳 247f) という。(おそらくこれは指示的な用法として考えられている)

これに対して、(ib)と(iib)の文法的述語「その海峡を一日に二度泳いだ」と「ダンギアン公の処刑を命じた」は帰属的な用法である。

両者の違いはなにかといえば、前者は「誰かがその海峡を一日に二度泳いだことがあるのを、われわれの聞き手が知っているか、信じている」ということである。そのように信じている時、「誰がその海峡を一日に二度お泳いだのですか」と問うことができると、彼は言う。逆に言うと、その海峡を一日に二度泳いだ人がいるかどうかわからないときには、そのように問えないということである。

「誰がボルトの妻ですか」

「ボルトの妻はだれですか」

「ボルトの妻は、どの人ですか」

「ボルトの妻は、どんなひとですか」

これらの問いは、ボルトの妻がいることを信じているときに成立する問いであり、「ボルトの妻」は指示的な用法である。ただし、ボルトに妻がいることは知ってはいるが、その人を特定することはできない。

「ボルトの妻は、帰りましたか」

ボルトの妻をパーティで見かけて、しばらくしてこのように問う場合、質問者は、ボルトの妻を同定できる。

「ボルトの妻は存在しますか」「ボルトに妻はいますか」は、ボルトの妻がいることを信じていないので、指示的な用法であるとはいえない可能性がある。

